

堀辰雄「かげろふの日記」小論

——他者の自覚——

山本裕一

一 はじめに

「かげろふの日記」は『蜻蛉日記』上・中巻に材をとつて執筆され、昭和十二年十一月に脱稿、翌十二月に『改造』に発表された。以降「ほととぎす」「姨捨」「曠野」と続く堀辰雄の王朝小説の第一作である。当時の社会情勢や堀の状況から堀辰雄の日本回帰、折口信夫・リルケとの影響関係等を考慮しつつ論じられてきた。この作品はつとに福永武彦らの指摘^①があるように、「物語の女」の続編として構想されたと思われるふしがある。つまりこの作品は、単に王朝小説の嚆矢であるばかりでなく、堀の芥川体験を起点とし「聖家族」「物語の女」「菜穂子」「ふるさとびと」と生涯にわたつて書き継がれるロマン「菜穂子サイクル」の作品群にもつながる作品なのである。加えて、この作品は「風立ちぬ」の終章が

書けずに越冬した後に書かれた作品であり、この作品の脱稿後ひるがえつてすぐ「風立ちぬ」の終章が書かれている^②。これらの点から「かげろふの日記」が堀のさまざまな系統の作品群に密接な関係を持つており、堀文学を考へる際に非常に重要な位置を占める作品であることがわかる。

この作品の成立過程については、自作解説とも言える「七つの手紙」（昭和十三年八月、「新潮」に「山村雑記」の題で発表）に詳しい。ここでは、堀はリルケを介して古典に接近し、『蜻蛉日記』の中に「恋する女」を発見したと書いている。このことは堀辰雄辞典^③にもあるようにこの作品を理解する上で、定説として論じられてきた。当時堀は、作品、書簡、日記などでおびただしくリルケについて語つており、リルケの影響力の大きさは

明白である。また、先の「七つの手紙」をはじめとする堀のさまざまな発言から、この作品へのリルケの影響関係は否みがたい。たとえば「木の十字架」（昭和十五年七月『知性』）では堀は立原道造を「恋しつつ、しかも恋人から別離して、それに身を震はせつつ堪へる」「リルケイアン」と評しており、この定義は「かげろふの日記」の女主人公の置かれた状況と近似している。これ一つとつてみても作品への影響は見えて取れよう。

しかし、リルケの影響という視点によってのみ作品を見ることは危険である。今回の論考では、物語の女の続編として作品を見た時、何が見えてくるのか、原典とは異なる登場人物の描写から吟味し、私見を述べることにしたい。

二 本文の改稿について

——「物語の女」のテーマの変奏として——

「かげろふの日記」は後に昭和十四年二月『文芸春秋』に発表される「ほととぎす」とあわせて同年六月に創元社より『かげろふの日記』として刊行され、その際、若

干の改稿がなされている。今回は堀文学における位相を考えるに際し独立した作品として扱いたいため、テキストとしては初出の「改造」の文章を使用し、「ほととぎす」と切り離して考察することにする。「ほととぎす」の間に一年以上の時間が流れ、いくつかの作品が書かれていることと、同じ主人公であってもその女性像にかなりの変化が見られることから、一つの作品として扱うのに無理があると考えるからである。この判断は、「ほととぎす」は「殆ど私のフィクション」で本来は『かげろふの日記』なる表題の下に一括すべき」だが切り離して『ほととぎす』という表題のままにしておいた方が自然でよい」（堀辰雄作品集第四・晩夏）あとがき、昭和二十二年九月、角川書店）とする作品集収録時の堀の判断とも合致するので、妥当なように思われる。

初出から単行本への本文の改稿の内容について見ると、改稿のうちもっとも大きなものは、表題の次に置かれた「***様」宛の「無名の女」からの手紙文の削除である。この箇所を除くと、後述する数例と、初出では「あ

の「子」とあつた息子の呼称が「ほととぎす」と同じ「道綱」に変えられていること以外、異同のほとんどが細かな字句の修正、言い回しの変更・追加（修飾語を増やすなど、状況・感情を強調する傾向にある）である。改稿は「ほととぎす」に合わせて主人公の感情の激しさを増しつつ、一つの歴史小説としての体裁を整える作業が主であつたと考えられる。

作品集収録時に削除された手紙の部分は、初出時の作品の枠組みをなすものである。ここでは、「無名の女」は数年前に亡くなつた母の手帳の処理に困つており、最近知り合いになつた人からの薦めで***にその手帳を送つたという事情が語られている。

それにはずるぶん躊躇いたして居りましたが、この程「物語の女」など拝見いたしますにつけ、あなた様なら（中略）この、古い日記に託してなりと、せてご自分を生かさうとなされた母のお気持ちもよく御わかり下されるかとも思はれますので、この手帳をお送りする決心をいたしました。

文中に見える堀の作品名「物語の女」から宛先の**が堀を暗示すること、娘の言葉によって、この「かげろふの日記」の作者である「無名の女」の母と「物語の女」の女主人公が近い存在であると認識されていることが示唆されている。また、母が娘に日記を残すこと、娘が母を受け入れることなく、もてあまして日記を手放すことは、前作「物語の女」の娘、後年の「菜穂子」の菜穂子を想起させる。

また、堀文学の読者なら、次に挙げるこの作品中のあと二箇所の大きな改稿から、「聖家族」（昭和五年十一月『改造』）の「どちらが相手をより多く苦しますことが出来るか私たちは試して見ませう」という手紙の切れ端に書かれた言葉や「物語の女」（昭和九年十月『文芸春秋』）で森から送られた手紙の一節「われをこそ君は愛さん、われ君を苦しめたれば……」という言葉、それらの言葉に集約された両作品の苦しめあう愛のモチーフを想起することは難しくなろう。

さうしてこの苦しみの儘にわが身がはかなくなつて

呉ればとさへ切に願つたこともございましたが、それでもまだ私は苦しみ足りなかつたとても申しますのか、又かうして心憂い里住まいをいたすやうになりました。けれどもかういふ今の私をも一向お見分けがつかぬと見え、あの方は昔と少しも変らぬ苦しみを私にお与へなさいますが、本当にこの頃の私と申しましたら、もうさういふあの方ゆゑの苦しみ無しには、もつともつとはかなくて、あるかないか知れない程になつてしまひさうだと思ふ位でございます。(「その七」、以下七と略記。「その八」まで同様に略記)

そのお方からはなぜか、(私といふものの何処かに自分でも知らず識らずに人を苦しめるやうなところがあるのだらうかしら?) いつも私の事をお恨みなさるやうな御返事ばかりおよこしになるのだつた。

(二)

前者には愛の苦しみに対する考え方の変化の過程が述

べられている(「本当に」の前の部分。単行本収録時には削られる)。「わが身がはかなく」なつて夫に対する苦しみなくなることを望んでいた女が、苦しみがなくなると「あるかないか」になるほどその苦しみを望むようになったと、逆転した女の心理が描かれている。また、この後の場面で、「別人のやうに」見える女に不安になり乱暴する夫に、女は「そんな心にもない乱暴なことをなさりながら、反つてあの方が私にお苦しめられになつてゐる」のに「御自分ではそれには一向お気づきなされようともせずに入らつしやるらしかつた」(八)と考えている。この作品末尾には、愛する男に苦しむ愛人、愛人に苦しむ男、(芥川体験)から堀が見出したモチーフ「苦しめあう愛」がその実体をもつて描かれている。

また後者の引用は兼家の正妻に出した手紙なので本来は「苦しめあう愛」のテーマに関係はない。しかし、「御自分ではそれには一向お気づきなされようともせずに入らつしやるらしかつた」(八)という言葉とこの引用を頭におき、引用中の「そのお方」を兼家と読みかえると、程度之差こそあれ、兼家が実は作品冒頭から女から傷つ

けられ、苦しんでいたのではないかという読みの可能性を教えてください。しかし単行本の文章では「或は私だけが別して人の苦しみといふものを過当に見るやうなところがあるのだらうかしら」とカッコ内を書き直され、幾分ニュアンスの変わった次文に続いて「誰もかもみんなさういふ私をお避けになつたとみえる」と書き加えられ、単なる女の自意識の問題とされてしまう。

このように初出の原稿は「物語の女」との関係が深い。しかし、「聖家族」では過去の話として主人公の苦しみを生む存在として点描され、「物語の女」では主人公によつて直接的には回避された、妻ある男と女の「苦しみあう愛」は、この作品でははっきりと具現化されている。言い換えれば愛を求め続ける女主人公を描いたこの作品は、そこから回避しようとした三村夫人を描いた「物語の女」の陰画、変奏なのである。

三 原典との対照から見えてくるもの

この作品についてはすでに先行文献で原典との比較が盛んに行われている。「堀辰雄辞典」の記載を見ると以

下の通りである。

原典との比較では、塚本康彦が「原典に沸騰し逆巻く女の激情怨念が、堀の解説によつて萎え、冷え」と酷評した（『平安朝文学―堀辰雄の日本的なものの』昭36・3「解釈と鑑賞」）。これを受けて杉野要吉は、堀は恣意的な省略によつて歴史小説の試みに失敗してリルケ的主題に転換した、と新見を提起した（『堀辰雄「かげろふの日記」について―歴史小説の挫折』（昭45・2）。大森郁之介は「かげろふの日記」では原典に縛られており、「ほととぎす」で「愛する女」は成長したといた（『演習 太宰 堀石坂』昭44・7、審美社）。なお、原典は序文から解釈が分かれており、原典を深くとらえた比較が望まれる。

「かげろふの日記」はその後編「ほととぎす」が火車で資料を消失したため自由に書かれたのと異なり、記事の順序が前後することを除けば、特に新たなエピソード

を創作することもなく、少なくとも本文の記述を追って書かれているといつていい作品である。精密な原典との全文対照・検討を行っている、大森郁之助の『かげろふの日記』の強さと弱さ^④、杉野論文^⑤で述べられていることを参考にまとめて言う、この作品における堀の創作はほぼ心理描写に限られ、事件の創作はない。原典から除かれた部分は贈答歌と、大筋と関係の薄いエピソードが大半である。大森氏はその状況を「素材と謂うよりも原作と謂う方が」「妥当と思われる」としている。ところが、氏が指摘しているように、原典をかなり忠実にたどっているにもかかわらず、この作品は先の引用にあるように原典との齟齬を批判されている。それは一体どこに起因するのだろうか？

原典に沿って忠実に書かれている作品である以上、それは原典からの逸脱部分、すなわち、省略部分、加筆部分、変更点を精査することで明らかになるだろう。しかし、原典は長い作品で、解釈も多岐にわたるため判断に苦しむところも多い。また、以上の点についてはすでに杉野、大森の二氏をはじめとする精密な原典との対照研

究があり、屋上屋を重ねる愚は避けたい。そこで今回は、先行論文を助けに、堀の加筆部分に見られる顕著な傾向を拾い、それを分析して検討を加えることとする。

検討箇所を原典と明らかに異なる加筆・変更部分に限って見ると、私見では原典との齟齬を生じる因子として三つの因子があると考えられる。そしてそこには堀のモチーフが現れている。以下順に述べることにする。

四 「かげろふの日記」の女性像

——夢見がちな近代人としての設定——

第一の因子は主人公の分析的、自嘲的な、しかし、夢見がちな近代的な女性としての性格設定である。これは大森論文では「(B) 近代人風な、露悪的な人間観や自虐的心情」「(C) 強い自意識、および、自他の心理に対する客観的、分析的態度」「(D) 他者の不幸に対する強い関心」としてとりあげられている。大森論文は「これらの彼女の性向は、兼家との関係という作品の主題を直接かつ本質的に性格づけるものではない」と軽く触れるにとどめているが、主人公の性格設定の変更の意味について

はやはり一考を要するだろう。

夫の浮気相手の「坊の小路の女」の子が死んだ時、原典にも存在する、本当に「すつぱりと」したという女の気持ちに続けて、次のような感懐が書き加えられる。

——こんな人らしくもない心の中まで此処に書きつけるのは、ちよつとためらわれもしたけれど、かう云ふところに反つて生き生きとした人の心の姿が現はれてゐるかとも思へるので、この私と云ふものをすつかり分つて貰ふためには、やはりさう云ふものまで何もかも私はこの日記につけておきたいのである。(二)

この場面、彼女は日記を書きつけているにすぎないのに、自分のことを「すつかり分つて」貰おうと願つてゐる。個人の純粋な思いではなく、一般化された「生き生きとした人の心」を書く作家的欲求にとりつかれており、ここには作者堀の意図が透けて見える。書かれているものはもはや原典の夫の「愛を独占したい」女の情念では

なく、近代人の自意識である。原典の道綱母は夫の愛を奪つた女が子を失つたことに溜飲を下げてゐるばかりで、「生き生きとした人の心」を描くことも、「すつかり分つて貰う」ことも望んではまい。原典の情念が「堀の解説によつて萎え、冷えた」「原典『蜻蛉日記』に息づく歴史的真実から遠ざかつた」(前出堀辰雄辞典の記載)とする諸氏の批判の対象となる一例である。これ以外にも、たとえば本稿二節で用いた引用「私といふものの何処かには自分でも知らず識らずに人を苦しめるやうなところがあるのだらうかしら」のように、女は自らを省み、自意識に苦しんでいた。このような描写は作中に多く、女は常に分析し、苦悩する近代人として描かれてゐる。

このような女の自己分析のうち注目したいものが次の引用である。これは原典の序文、「無名の女」の手紙に続いて作品冒頭に置かれた女の感懐の中にある文である。

それにまた、世間の人々が、私のやうにこんなに不為合わせになつたのは、余にも女として思ひ上つてゐたためであらうかどうか、その例にでもするが好

いと思ふのだ。(一)

この「余にも女として思ひ上つてゐたためであらうか」という問いは、堀が階級的解釈から個人的性格へと「品高き」を変訳（前出杉野論文）したところであり、「その三」にもこれと同趣の発言が繰り返されている。性格設定として無視できない要素である。

これと云ふのも、一体、自分の心が驕つてゐたのだらうかしら？ああ、こんな事になるなんて自分は夢にも思はなかつたものを。それほどまで私は大きな夢を持ちつづけていたのに——(三)

ここで堀は「思ひ上り」や「驕」りの原因として「夢」の大きさをあげている。この作品の女主人公の苦悩の原因である「思ひ上り」のさらに原因となっている「夢」とは何をさすのであろうか。堀は「かげろふの日記」について後に「嫉捨記」（昭和十六年八月『文学界』）で次のように述べている。

それらの日々は、私のもつて生れたどうにもならぬ遙かなるものへの夢を、或は其処の山々に、或は牧場に、或はまた樺や樅などの木々から小さな雑草にまで寄せながら、自分で自分に厳しく課した人生を生きんと試みてゐた日々にはかならなかつた。私は或晩秋の日々、そこで「かげろふの日記」を書いてゐた。

ここに書かれた「もつて生れたどうにもならぬ遙かなるものへの夢」は『風立ちぬ』の「冬」の章、十一月十日のくだりの「自分の小さい時から失はずにゐる甘美な人生へのかぎりない夢」と時期的・表現的に近似している。以下にその部分をあげる。

私は数年前、屢、かういふ冬の寥しい山岳地方で、可哀らしい娘と二人きりで、世間から全く隔つて、お互がせつなく思ふほどに愛し合いながら暮らすことを好んで夢見てゐた頃のことを思ひ出す。私は自

分の小さい時から失はずにゐる甘美な人生へのかぎりない夢を、さういふ人のこはがるやうな苛酷なくらゐの自然のなかに、それをそつくりそのまま少しも害はずに生かしてみたかつたのだ。

この二つの引用文を合わせ考えると、「夢」とは堀の生来の資質から来るものであり、「お互がせつなく思ふほどに愛しながら暮らす」ことに代表される「甘美な人生」の実現の願望であることがみてとれる。

「かげろふの日記」に即して考えれば、「夢」は女の考えるありうべき愛の姿、甘美な生活であろう。しかし、そもそも一夫多妻制の時代に正妻のいる兼家に純愛を求めてもそれは果たせない。しかもそれは個々の愛情の発露で満たされる性格のものでもない。

女が「昔の自分が心待ちにしてゐたすべての事と今の自分とは何と云ふひどい相違だらう」「あの頃はこんな雨風にだつて御いとひなさらぬものをと自分は信じていたのに」と在りし日の兼家の愛情を思い出す場面(三三)では次のような女の感懐が書きこまれている。

しかしいま、かうやつてしみじみと思ひ返して見ると、その頃だつて自分はちつとも気の緩むやうな心もちのした事なんぞはついで無かつたやうに思はれた。

「あの頃」「その頃」は「何を措かれても、殆ど毎夜のやうに私の許にお通ひになつて」(一)いた、女が愛されて幸福だつたころをさすと思われるが、その時ですら女は兼家に気を許すことがなかつたという。女の求めているのは現実の愛情の発露ではなく、彼女の中にある夢なのだ。それゆえ女は満たされない。夢を強く現実に求めて得られないことが苛立ちを生み、反動として、大森論文の挙げるような「少し自嘲的な気持ちにもなつて」庭を荒れたままにしておく自虐(B項)や姉の男、道綱、呉竹などに自分を投影してみるような強い自意識(C項、D項)を生むのである。

次に堀がこのような性格設定をしたことの意味につい

て考えてみる。「姨捨記」(前出)では先の引用に続く部分で以下のように述べている。

私がさういふ孤独のなかでそんな煩惱おほき女の日記を書いてゐたのは、私が自分に課した人生の一つの過程として、一人の不幸な女をよりよく知ること(中略)そして私の対象として選ぶべき女は、何か日々の孤独のために心の休まるやうなこちらを引き立てて、ずんずん向こうの気持ちに引きずり込んでくれるやうな、強い心の持主でなければならなかつた。しかもそれは見事に失恋した女であり、自分を去つた男を詮め切れずに何処までも心で追つて、いつかその心の領域では相手の男をはるかに追ひ越してしまふほど気概のある女でなければならなかつた。

ここからは杉野論文(前出)のいう、当初の「真に歴史的存在としての主人公の生命の再現意図」はもはや感じられない。もちろん、これは後年になって書かれたものなので、執筆当時の心境を正確に表しているとは考え

にくい。「しかも」以下は余りに作品につきすぎた説明で、後からの付け足しの感が否めない。しかし、「風立ちぬ」体験のあとの空虚が「蜻蛉日記」の「強い心」を求めさせたとする堀の内的必然性は強く伝わってくる。なぜ「強い心」が必要だったのか。

前出の引用のように堀は『風立ちぬ』でも主人公を「夢」を求める男として設定している。しかし作中には婚約者と自分の心が乖離していくのをどうすることもできず、「悔いに近いやうな気もち」に苦しむようになる男の姿を描き続けた。それはいわば自らの夢を追う心の弱まりであり、「日々の孤独のために心の休まるやうな」気持ちになるものである。彼の師芥川が失恋時の気の沈みから「なるべく現状とかけ離れた、なる可く愉快な小説が書きたかつた」(『あの頃の自分の事』大八・一『中公論』)ので「羅生門」を書いたように、堀もそこから脱出するために現状の「弱い心」とかけ離れた「強い心」を必要としたのではないか。

大森郁之助は『風立ちぬ』完結前後で「かげろふの日記」を書くことが強い心を得て実生活を打開するこ

とになるのかという点について、『かげろふの日記』の〈強さ〉を以て、客観的には絶望であつても主観としての愛を捨てぬ強さ、という風に一般化するなら、今は世にないひととの〈風立ちぬ〉体験を変わることなく護つてゆく生き方の再確認につながりそうにも思える」が「愛するにも愛さぬにも相手がこの世に生きていない」のだから、〈強い〉実生活の打開につながっていたらうか」と疑義を提出している。愛という視点から見れば、氏の言われる通りである。しかし、〈強さ〉を愛という直接的なものではなくではなく、それを含みこんだ夢を追う心の強さととらえたらどうであろうか？ 夢を追う強い心の持ち主道綱母を主人公とする「かげろふの日記」を書くことで、堀は、「風立ちぬ」を書く中で弱つて行つた夢への求心力を、傷つきながらも、自らの資質から生み出されてくる夢をどこまでも追い続けて生きぬくことを再確認しようとしていたのではないか？ そのためには主人公の性格は、「風立ちぬ」と同じ夢見がち、分析的な近代人で無ければならならなつた。「かげろふの日記」は「強い心」で書かれた「風立ちぬ」の焼き直しの存在

なのである。

前節で私は「かげろふの日記」を「物語の女」の変奏とし、ここで「風立ちぬ」の焼き直しと述べた。これは一見矛盾するように見えるがそうではない。堀が〈風立ちぬ体験〉のさなかにあつて「物語の女」の構想を練つていたことはよく知られている。また〈風立ちぬ体験〉において苦しめあう愛の体験をしたことが「風立ちぬ」の中から読み取れる。「かげろふの日記」は「物語の女」の苦しめあう愛のモチーフが、実体験をもとに夢を追う心のモチーフへと昇華された作品なのである。

五 主人公の女の愛のかたち

—— 想念から現実へ ——

第二の因子は、女の内面描写・外面描写とその変化である。まず外面の描写から見ていこう。

彼女の愛情の強さは、堀によって作品の諸所に新たに付け加えられた彼女の行動・外面の描写からうかがい知れる。兼家の動向を「とても気になつて」様子をうかがい、通り過ぎる兼家の咳を「どこまでも追ふやうにして」、

「我知らず耳を側立ててゐる」(一)。兼家がやつてくると聞くと、「どうせいつものやうなのだろう」と思いつつも「胸をときめかせ」(四)、文が届くと「貪るやうに読んでしま」う(五)。これらは無意識のうちに兼家の愛を求めている女の深層心理、「執拗なほど愛を求めつづけ」(七つの手紙)る女の気持ちがあがわれる行動である。

しかし、兼家を求めつつも、女はこびない、泣いて訴がることもしない。兼家と直接・間接に対峙する場合、常に何もせずただ耐える姿で描かれる。兼家が山に迎えに来たときも「無言のまま、強いてつれないやうな様子を見せて」いる。むさぼるように兼家からの文を読んだ後も、「すぐ何でもないやうにそれをそのまま打棄てて置」く。道綱に返事を持たせてやる場面では雷雨に見入り、「ちつと」したまま「恰もさうやつて我慢をしてゐることだけが自分のもう唯一の生き甲斐でもあるかのやうに」感じている(五)。帰ることになった時も「いつまでもちつと身じろぎもせず」に「いるし、「物も言ふ気にはなれな」いで無言である(六)。これらは現実には

協せず、凛として現実を拒む激しい抵抗の表象として作品後半に特徴的に見られる。もちろんこれは前出大森論文のいうように、女が「不自然さを自ら感じ」る点から考えて「別の或る根深い希求が抑圧された反動」にすぎず、「脆弱」なものである。しかし、女の愛情を求める姿と対比的であり、その反動として、意志の激しさが強調されている。

次に内面描写について順にみていく。これについては堀自身が作品解説をしている「七つの手紙」の記述が理解の助けになるので次に示しておく。

私の前に現はれたその「蜻蛉日記」といふのは(中略)——いはば、それが恋する女たちの永遠の姿でもあるかのやうに——愛せられることは出来ても自ら愛することを知らない男に執拗なほど愛を求めつづけ、その求むべからざるを身にしてみても知らぬでは、せめて自分がそのためにこれほど苦しめられたといふ事だけでも男に分かせようとし、それにも遂に絶望して、自らの苦しみそのものの中に一種

の慰藉を求めるにいたる、不幸な女の日記です。

この内容は「蜻蛉日記」のそれではなく、「かげろふの日記」の要約となつてゐる。作中の主人公は兼家に対してははじめそれほどでもなかつたが、いざ結婚すると坊の小路の女の存在を知つて意地になり、次のような感懐を抱く。

いつもに交らず、こちらがこれほどまでに切ない心持をお訴へしてゐるものを、あの人はさもこともなげにあしらはれようとしかなさらないのだ。どうしてそんな女の事なんぞを私にもつと出来るだけお隠しなすつて（中略）私をお騙しになつて居てくれられなかつたものなのだらうか？（一一）

すぐ後にも「いかにも何気ないやうなお顔」で折々訪れる兼家を見とがめている記述が見られる。女はどうして騙してくれなかつたのかと恨んでいるのだから、兼家に対する不満は浮気をしていることでも愛情の薄さでも

ない。兼家が浮気の問題を妻の前で隠す気配りを持たず、「こともなげ」「何気ない」なこととして扱ふ「愛する」とを知らない男」であることで苦しめられてゐるのである。不満の原因はただ自分の「切ない心持」を受けとめてくれないという点にある。言い換えれば、自己の想念の中にある兼家と現実の兼家との違和感なのである。そして女は、兼家の訪れが遠のくと、さらに切ない思いを抱くようになり、空虚な気持ちから物思いにふけるようになつていく。

これまでだつたらこんなことは無かつたのに、どうしたのか、私はまるで心が空虚になつて、そこいらに置いてあるものさへ静かに見られない癖がついてしまつてゐた。（中略）そんな事まで考へ出しながら、あの方がかうしてお離れになればなるほど、あの方に對してついぞいまままで覚えのなかつた位にお慕はしさのつものつてくるやうな自分をば、自分でどうしやうもなくてゐた。（一、傍線山本）

「こんなこと」は途絶えだした兼家の来訪を指しており、兼家不在の時の女はここに描かれたように、空虚に陥り「物思い」にふけることを強調されるようになる。

「その四」では「例の物思ひ」と書かれ、「その五」でも山の退屈な日々の中で「そんな時など、それほど空けたやうになつてゐるをりをりの自分の姿が、私にも何かしら異様に思はれたりするのだつた。」「私はさうやつてしまひには自分を言ひやうもなく苦しめだすのが知れ切つてゐるやうな物思ひばかりをしてゐた」(傍線部山本)と書かれる。

女は現実の兼家が想念の中の兼家とますます乖離すること、求める気持ちが空転し、心がうつろになつていく。一方その中から女は次第に「自らの苦しみそのものの中に一種の慰藉を求める」ようになつていく。先の「その一」からの引用文の傍線部にみられるそれは「その七」「その八」に見られるような女の救いの複線となつている。

しかし、病気による心境の変化(「知らず識らずの裡に、あの方に対する自分の気もちがいつもほど苦くはな

くなつて」くる(二))の後、沈静したかと思われた女の心は再び激発する。二月ぶりの兼家の文に「沸えたぎる」思いを抱き、女の前を素通りする兼家に対して女は「私だけは何気なささうに、さつきから止めずにゐたお勤をなほも続けてゐるやうなふりをしてゐたが、しかし心の中には何かいままでについぞ覚えた事のないやうな、はげしい怒りにも似たものを涌き上がらせてゐた。……」(四)と激情に襲われる。ここは原文では悔しがり言葉に出して語りだす場面であり、原典とは逆に言葉を飲み込ませることで、耐える外見描写との整合性をはかりつつ山籠りを決意する女の激情が効果的に描かれている。

女の激情に任せた行動は、しかし兼家によつて無理やり連れ戻されるといふ幕切れを迎える。そしてその時女の気持ちに変化が生じている。兼家に対しては常に耐える姿を見せ、何もしない話さないという形で抵抗していたのに、なでしこの話を聞きとがめ、からかう兼家に、思いがけず自分も笑い出し、「私と云ふものはたつたこれつきりだつたのかしらん」と思う。これは己の思い切つた行動が何も生み出せなかつたことで、それまでの自

分のありように「絶望」を感じたということだろうか、
我を張ることの無意味さを感じ、それまでの抵抗する心
が溶け、女は「これつきり」と自分の現状を省みる。そ
して「さうして私だけが——そう私は少なくとも、あの
山から帰つて来てからは、もう昔のやうな私ではなくな
りかけてゐる」（七）と変化を自覚する。

その変化の内容はその七の手紙部分に詳しい。すでに
本稿二節に引用をしているので略述すると「わが身がは
かなく」なつて夫に対する苦しみのなくなつて望ん
でいた女が、今では苦しみがなくなると「あるかないか」
になるほど苦しみを望むよになつたという心理がそれ
であり、続けて「昔みたいにあの方のためになんぞ苦し
むまいとは思はないが好い」「いくらあの方からお離れ
しようとも、もう自分がお離れできない事はよく私にも
分つてゐる筈だらうから。」と語る。女は「自らの苦し
みそのものの中に一種の慰藉を求める」ことを覚える。
現実の自分の有り様がたとえ自分の満足を得られるもの
でなくとも、それを受け入れ、生きていこうとする生き
方の転換。女は夢のように生きることが出来ずとも夢を

見続けるしかない己の性格を自覚し、その苦しみの中に
身をおくことを決意したのである。そしてその決意は最
後の場面で現実として描かれる。乱暴をする兼家に女は
自らのために苦しむ兼家を見て、翌朝、次のような感懐
を抱く。

さうしてあくる朝になつて、やつと平生のいかに
も屈託のなささうなご自分に立ち返へられながら、
お帰りになつて行かれるあの方の後影を、私が今度
は急に、胸のしめつけられるやうな思ひでいつまで
も見入つてゐた。……（八）

「その八」では女は兼家に対して耐える姿を見せて抵
抗するでもなく、また物思いにふけることもない。耐え
ること、物思いにふけることで想念の中に生き、現実を
拒んでいた女はもはや兼家との苦しい関係を拒んではい
ない。ここで堀は堀固有の問題である「苦しめあう愛」
の現実へとたちもどつてゐる。そして堀はそれに苛立ち
破滅や空虚に向かうでもなく、またそれを回避しようと

するのでもなく、あえてそこに身をおくことによる魂の昂揚という決着をつけたのである。それは「風立ちぬ」体験の中から得ていた実感であったのかも知れない。

この女の姿勢は後の歴史小説や「菜穂子」にひきつがれる。たとえば、ここで見えてきた（現状への不満（激情）↓山へ（開放感と不安）↓夫の来訪（反発と歩み寄り）↓下山（心境の変化））というこの作品の構成は「菜穂子」の構成と近似している。菜穂子の特徴的な何かに「耐える」外見の描写、「空けた」姿や物思いの原形もここに見られる。この作品の成立が「菜穂子」の成立に大きく関与していることを最後に指摘しておく。

六 兼家への主人公の視線 —— 他者の自覚 ——

第三の因子は兼家像の違いである。この作品の兼家像は杉野論文（前出）によって「兼家の側にしても、私の見るかぎり、原典の兼家像を、堀辰雄の造形した一面的な男と単純化してとらえることはできない」「作者道綱の母にもできるだけの愛を示す兼家の一面が省略され、その「情愛に接した作者が」「幸福感にひたる」場合も

あるはずなのに、そういう「夫婦像の一面を意識的に切り捨て」られていると論じる。たしかにそういう傾向がある。しかし、そこから何か堀の意図が見えてこないか。

この作品は、常に女の目を通して書かれている。当然、兼家の人物像も女の目を通したものとなる。兼家像すなわち女の兼家に向ける視線は作品内で変化している作品冒頭で女は坊の小路の女のことを「さも事もなげにあらはれようとしか」せず、「何気ないやうな御顔」で現れる兼家に物足りなさを感じ、「いつもの真面目とも冗談ともつかなくやうな調子」で話す兼家に「お虐めなさる」という被害者意識を抱いている（二）。また盆供をきちんとしてくれた兼家の文に「例によつて少しひねくられて」返答する（二）。これらの女の判断や行動は素直なものではなく、自分の想念によつて現実を脚色して見る質のものである。

しかし、山からの帰宅後、女は変化を見せる。兼家の後姿に「心なしか、いつになくお辛そうにさへ見えた」と感じ、翌朝の文にも「いつもに似ずお心がこもつて」いるように感じる。やはり自分の想念を通しての脚色で

ある点は同じだが、現実の兼家に対して目を向けだしていることに注目したい。その後、訪れを中止した兼家に、「その一」にある思いと同種の「もつと私の気もちをいたはつて下さるやうなお言葉がお言ひになれないものなのかしら。」という思いを繰り返して、「あの方は相変らず以前のあの方だけだつたのらしい」と思い直している(七)が、離れたくても離れられないのだから仕方ないと諦めると再び兼家に観察の目を向ける。「あんまり言ひわけがましく仰やるのを反つてをかしい位に」思い、「何か気がかりなやうに」帰る姿を眺める(八)。乱暴をする兼家に女は自らのために苦しむ兼家を見て、次の朝「平生のいかにも屈託のなささうなご自分」に戻つた兼家の後影を「胸のしめつけられるやうな思ひ」でいつまでも見入る。(八、前節で引用)

女は、現実の兼家に目を向け、観察するように変化している。自らの現状、一般的でない愛の形を自覚することを契機として、女ははじめて兼家を想念を通して認識するのではなく、他者として認識するようになっていく。想念とのギャップから自らを苦しめる存在ではなく、自

らのために苦しみ暴れる他者、己と同じ「現実の相手を自己の情念に同化しようとするゆえの苦しみ」(前出大森論文)を持つ他者としてみる事が出来るようになっていく。

これは「美しかれ、悲しかれ」(昭和十四年十二月「文芸」)で堀がシャルドヌの恋愛論から引用する「が、最後はそれは反対に(論者注、恋愛に対する自分の考えをさす)一人の女性をあるがままに受け入れること(中略)一人の自由な女性を受け入れることであると考へるやうになつて来た」という境地に近い。この他者を自覚し、あるがままに受け入れる姿勢を描くことが、兼家像の一面的な描き方と最後の作文によつて可能になっている。そしてこの自覚こそ、前節で見た想念から現実への視点の転回を支える基盤となるものである。

この他者の自覚は堀自身のものもあつたようだ。堀は「美しかれ悲しかれ」(昭和十四年十二月「文芸」)の中で『風立ちぬ』を書き上げた後で、一年ばかり山のなかに孤独に暮らしてから、やうやく他人の方へ目を向けるやうになり、なにかそれに話しかけたいやうな欲望

を感じながら「かげろふの日記」を書いた」「この頃は何かにつけて、もうすこし自分といふものを突放して、他人といふものに真面目に向はなければならぬと考へ」ているといい、「この私のはじめての他人への話しかけであつた作品、およびこれからの私のしようとしてゐる長い他人との対話であるべき新しい仕事から見ればこれまでの『美しい村』や『風立ちぬ』なんぞはほんの私のモノローグに過ぎないでしょう」としている。他者を自覚し、他者を受け入れること、それが越冬と「かげろふの日記」のもたらしたものであつた。新潮社版「聖家族」序（昭和十四年八月）によると、「物語の女」は堀が「私が自分自身ではない或物の裡に自分を置いて書かうと試みた最初の作品である」という。しかし、そこには「他者」を自己の想念から突き放してみる主人公の自覚は描かれていない。この作品において、はじめて堀は他人に目を向ける。それが翻つて「風立ちぬ」の終章「死のかげの谷」を書くことを可能にしたのではないか。

「風立ちぬ」の終章「死のかげの谷」十二月二十日のくだりでは主人公は「未だにお前を静かに死なせておか

うとはせずに、お前を求めてやまなかつた、自分の女々しい心に何か後悔に似たものをはげしく感じながら」「レクイエム」を読み、そして翌日は死んでしまつた婚約者の気配を感じながら「レクイエム」の一節をつぶやく。

帰つて入らつしやるな。さうしてもしお前に我慢できたら、

死者達の間で死んでお出。死者にもたんと仕事はある。

けれども私に助力はしておくれ、お前の気を散らさない程度で、

屢々遠くのものが私に助力をしてくれるように、

——私の裡で。

死んでしまつた婚約者を自己の想念の中に置き、それと同化して生きようとするのではなく、他者として自覚し、現実には立ち戻ることがここに決意されている。この後、主人公の私は谷の明かりから自分の人生の可能性を見、そして、雪に覆われた谷の本当の姿が見え出す。こ

これは象徴的ではあるが、「かげろふの日記」の女が、男をありのままに受け入れ、自分の想念から自由になることで現実の兼家が見え出すのと近い。

（風立ちぬ体験）で、やすまるやうな気持ちにとらわれていた堀がもう一度「風立ちぬ」に立ち戻りレクイエムを描くには「かげろふの日記」が必要だったのだ。「かげろふの日記」は「物語の女」で書かれた「苦しめあう愛」のモチーフを「風立ちぬ」体験をもとに見つめなおす作品であった。そしてそれは堀の他者への自覚を生み、その後の作品へ向かう一つの転回点となるものであった。

（1） 福永武彦「堀辰雄の作品」新潮社版堀辰雄全集月報、昭和三十三年八月。冒頭の手記と双方に傷つけあう愛のテーマが示された文が共通していることから、続編の構想を見ている。なお、同種のこととは竹内清己『堀辰雄と昭和文学』（昭和四年六月、六弥井書店）でもさらに詳しく述べられている。

（2） 筑摩版堀辰雄全集別巻2（昭和五十五年十月）の

年譜の記載を要約する。昭和十一年十一月「冬」の執筆後、終章を書こうとしたが、果たせず越冬。翌年春より王朝小説に親しみ、折口信夫『古代研究』を机辺におき、十一月には彼の講義を聴講していく。九月からかかっていたこの小説を十一月中旬に書き上げ（続編は火事のため続行不可能となった）、同年十二月二十日過ぎ「風立ちぬ」の終章「死のかげの谷」を脱稿。このように年譜からだけでもこの二つの作品の関係の深さがうかがわれる。

（3） 堀辰雄辞典（平成十三年十一月、勉誠出版）には吉村貞司、谷田昌平、吉田清一、高田瑞穂をあげて「定説化している」とある。同様の指摘は枚挙に暇がない。神品芳夫も「堀辰雄とリルケ」（『国文学』昭和五十二年七月号）で「堀辰雄はリルケに教えられてこれらの女たちの生き方に感動し、ひるがえって日本の王朝女流日記の作者たちにもそれに類似した生のかたちがあることに思い到った」としている。

- (4) 『論考 堀辰雄』 (昭和五十一年一月、有朋堂)
所収
- (5) 「堀辰雄『かげろふの日記』について——歴史小説の挫折」昭和四十五年二月
- (6) 「昭和十年代の堀文学」、『堀辰雄——昭和十年代の文学』(平成五年十二月、リーベル出版) 所収
- (7) 『風立ちぬ』完結前後、『論考 堀辰雄』所収